

カラカネイトトンボ 唐金糸蜻蛉

Nehalennia speciosa

釧路市医師会
釧路第一病院

わ の ゆうじ
和野 雅治

鳥撮り・トンボ撮りの趣味が高じて、道東は釧路に流れて来た。2023年中には後期高齢者の仲間入りという年代。血液専門医だったのが、今は、外来は生活習慣病、病棟では人生の最終章を迎えた患者様たちの診療。80代で矍鑠として働いている先生方が少なからずいるのは存じているが、自分については、“隠居医者”というところ。まだ目が見え、耳が聞こえ、足腰に支障を感じていないところが始末悪い。週末にはカメラを携え、あちこち徘徊するのが習慣である。

鳥撮り・トンボ撮りと道東との結びつきは、ラムサール条約登録湿地の多さである。2022年現在、日本全国でラムサール条約登録湿地は53か所ある。そのうち、13か所が北海道にあり、中でも7か所は道東に集中している（①釧路湿原、②阿寒湖、③厚岸湖・別寒辺牛湿原、④霧多布湿原、⑤風蓮湖・春国岱、⑥野付半島・野付湾、⑦濤沸湖）。さらに加えれば、世界自然遺産の知床半島もあるではないか。道東は隠居医者にとっては魅力に満ちている。

ラムサール条約の正式名称は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」で、1971年、イランのラムサールで開かれた国際会議で制定されたのでこの名称がある。「水鳥が生息する場所と共に、多様な生き物を育み人間の産業となる資源や水資源となる湿地を、将来に渡り持続的に活用するという賢明な利用を考え、適切に保護・管理していく」ことを目的としている。SDGsで言えば、15番目の「陸の豊かさを守ろう」という目標に該当するが、最終的にはSDGsの17の全ての目標に関連すると思う。

で、カラカネイトトンボである。

イトトンボの種判別は結構難しい。色・姿だけではなく、後頭条の形、尾部の紋様の形や分布などを参考に識別する。捕獲して仔細に調べるのが正道だろうが、私は「撮りはしても獲りはしない」。多角度から撮った写真を、図鑑やネット検索を参考に調べる。その過程が楽しい。初見、初撮りのトンボと分かれば、また嬉しい。それまでは見たことがなく、釧路に来て初めて出会ったイトトンボの一つがカラカネイトトンボである（釧路湿原温根内木道）。大きさ25～30mmほど、飛翔能力は高くなく、広い範囲を飛び回る訳ではない。北海道と本州北部や高

原に生息するが、産地は局所散在的で、我が国での個体数は少ない。成熟個体の尾部の色が唐金色（金属光沢のある金緑色）であることから、カラカネの名がある。成熟につれ体色は変化するが、私が最も美しく思うのは、複眼がライトブルーの未熟個体で、この時点では尻尾の金色味は薄く、金属光沢のある緑色をしている。このイトトンボと初めて出会った時、それまで見たことがない後頭条の形に気づき、興奮したものだ。

札幌市豊平区の西岡公園は、単一公園としてはトンボの種類が最も多く観察される公園の一つで、2018年時点で52種類のトンボが記録されていた。が、そのリストにカラカネイトトンボはない。推測するに、多くのトンボがいる環境では、カラカネイトトンボはかえって生存競争に勝ち残れないのかも知れない。美しくも、どこかしら弱さ・儂さを感じるのは、私の先入観だろうか？

実は札幌にもカラカネイトトンボはいるらしく、北区篠路福移湿原に関連して「カラカネイトトンボを守る会」というNPO法人があるということ、釧路に来てから知った。札幌にいた頃に知ったとしても、離群性（高村光太郎の言葉を拝借）のある私が参加していたかどうかはわからない。もちろん、趣旨には100%賛同する。

カラカネイトトンボに出会えたことは、道東に来た成果の一つだが、もちろん他にも色々ある。トンボではマンシュウイトトンボ、ムツアカネ。鳥ではケイマフリ、チシマウガラス、カンムリウミスズメ、ウミガラス（オロロン鳥）、コオリガモ、オオワシ、タンチョウ。動物ではラッコ（野生）、アザラシ類、エゾナキウサギ、アメリカミンク（特定外来生物だけど）…… 枚挙に暇がない。

隠居医者は、今日も道東を楽しむ。何せ、不自由なく暮らせる人生を80年と仮定し、それを1日24時間に割り振った場合…… 私の時間は午後22時31分を回っており、残りは1.5時間も無いのだ！🙄

いやいや、意外とまだあるかもね。懲りない私である😊